



Profile — 小嶋祥三

1972年、早稲田大学大学院文学研究科心理学専攻博士課程退学。同年より京都大学霊長類研究所助手、助教授、教授、所長、慶應義塾大学文学部教授を歴任。文学博士。著書は *A Search for the origins of human speech: Auditory and vocal functions of the chimpanzee*。(京都大学学術出版会) など。

私は1978年3月～1980年2月まで、首都ワシントン郊外にある米国の国立衛生研究所 (NIH) に滞在しました。最初の半年は、京都大学70周年からの助成金で国立小児保健発達研究所 (NICHD) で、残りの1年半は NIH の資金で国立精神衛生研究所 (NIMH) で研究をしました。NICHD では J.D.ニューマンのラボにいましたが、ボスは D.シメスでした。シメスはそれなりの歳に見えましたが、オートバイで研究所に来るような人でした。コンピュータや装置に強かった。彼らはリスザルの音声の研究をしていました。私がここで学んだことは聴覚・音声実験の装置についてです。日本に戻ってマカザルやチンパンジーの聴覚と音声の実験をしましたが、このラボで学んだことが役に立ちました。

最初の数ヶ月は家具などを揃えるのに苦労しました。当時、NIHには日本人が多く、日本語で独り言も言えない感じでしたが、不慣れな外国生活では便利な面もありました。日本人が多く住んでいる

留学記

京都大学 名誉教授

小嶋祥三 (こじま しょうぞう)

アパートに偶然入居しました(今、ストリート・ビューでみると懐かしい)。日本人研究者から車を買いましたが、屋根に荷物をくくりつけられるようになっていたので、いろいろなものを運んで家を整えていきました。ガレージ・セールのある新聞を買いこみ、地図を片手にいろいろな家庭を回って欲しいものを手に入れました。大変だったが、楽しい思い出でもあります。

残りの1年半は NIMH のパット・S.ゴールドマンのラボで、アカゲザルでワーキング・メモリと前頭前野の関係をニューロン活動の記録と切除で検討しました。パットのラボの他に腹側、背側系で有名な M.ミシュキンのラボがあり、二人の上に H.E.ロスヴォルトがいました。ラボにはコンピュータがなかったため、論理素子で遅延反応課題を組み、ニューロン活動はデータレコーダに記録しなければなりません。霊長類研究所では課題制御も、ニューロン活動の記録もすべてミニ・コンピュータでやっていたので、不便で仕方ありませんでした。パットにコンピュータを使えないだろうかと聞いたところ、使われていないデスクのミニコン PDP-12 を見つけてくれました。幸い霊長類研究所でアセンブラでプログラムを書く訓練を受けていたので、実験がはかどりました。これには思わぬ副産物がありました。それは私への評価が高まったことです。ラボではウィスコンシン汎用テスト装置が現役で動いており、

コンピュータなど使われていませんでした。まして、研究者がプログラムを書くことなどなかったので、驚いたようでした。そうやって行った実験は *Brain Research* に三つの論文として発表しました。

パットは小柄だが、美しい人でした。家に招いた時、陶板を持参されました。陶磁器が好きなようでした。私の英語が酷かったのが、私が言いたいことをアレコレ推測する技能を身につけたのか、少しのことで多くを理解する頭の回転のよい人でした。私が帰国する少し前にパットはイェール大学の神経科学者 P.ラキッチと結婚し、イェール大学へ転出しました。それ故、最後の数ヶ月私は一人で勝手に実験をしていましたが、恐らくロスヴォルトが対応してくれていたものと思われます。ロスヴォルトには論文の原稿を見てもらいました。私がこの冠詞は必要かときくと、人差し指を撥ねるなどして、訂正してくれました。私の帰国後、パットは何回か来日し、霊長類研究所のある犬山にも来てくれました。犬山焼をプレゼントしました。しかし、2003年7月31日にパットは交通事故で66歳の生涯を閉じました(雑誌 *Cerebral Cortex* に追悼文があります)。もっと活躍できたのに本当に残念でした。私はしばらく聴覚と音声の研究を行いましたが、脳機能画像の進展をきっかけに前頭前野を含む脳の研究に復帰しました (<http://cognitivens.web.fc2.com/>)。パットにそれを十分に伝えられなかったことを残念に思っています。